高岡市埋蔵文化財調査概報第14冊

前田墓所遺跡調査概報II

—下関第2雨水幹線建設に伴う平成元年度の調査—

1990年3月

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査概報第14冊

前田墓所遺跡調査概報II

—下関第2雨水幹線建設に伴う平成元年度の調査—

1990年3月

高岡市教育委員会

例　言

1．本書は，高岡市開発部下水道建設課による公共下水道事業－下関第２雨水幹線建設に伴う，前田墓所遺跡の調査の概要報告書である。

2．当調査は，高岡市開発部下水道建設課の委託を受けて，高岡市教育委員会が実施した。

3．調査地区は，富山県高岡市関73番地に所在する。調査期間は，平成元年６月１日から６月21日までである。

4．当調査は，高岡市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事山口辰一が担当し，社会教育課長上田七郎，文化係長河合甚郎が総括をした。

5．本書の執筆は，山口が担当した。

調査参加者名簿

発　掘

上田順子，岡島敏雄，工幸子，蔵野広義，島田英子，船木悦子，松井弘子，水外一郎，向しみ子，宮下真知子，吉久恵子

整　理

上田順子，工幸子，島田英子，船木悦子，松井弘子，宮下真知子，吉久恵子

目　　次

例　言
目　次

I　序　　説 …… 1
1．遺跡概観 …… 1
2．調査経過 …… 2

II　遺　　構 …… 4
1．第３地点 …… 4
2．第10地点 …… 6
3．第11地点 …… 6
4．第12地点 …… 6

III　遺　　物 …… 8
1．遺物の出土状態 …… 8
2．土器・陶磁器 …… 8
3．瓦 …… 9

IV　結　　語 …… 10

図　面　目　次

図面１　遺物実測図　燻し瓦－丸瓦
図面２　遺物実測図　燻し瓦－平瓦
図面３　遺物実測図　釉薬瓦Ａ－丸瓦
図面４　遺物実測図　釉薬瓦Ａ－平瓦

図　版　目　次

図版１　遺構　１．石垣西側（南西）
　　２．石垣東側（南西）
図版２　遺構　１．第３地点遠景（南西）
　　２．第３地点遠景（西）
図版３　遺構　１．第３地点全景（西）
　　２．第３地点全景（南）
図版４　遺構　１．第３地点北側据え方全景（南西）
　　２．第３地点南側据え方全景（北西）
図版５　遺構　１．第３地点北側据え方近景（南西）
　　２．第３地点南側据え方近景（北西）
図版６　遺構　１．第10地点全景（南）
　　２．第10地点全景（東）
図版７　遺構　１．第11地点全景（南）
　　２．第11地点全景（西）
図版８　遺構　１．第11地点近景（北西）
　　２．第11地点断面（東）
図版９　遺構　１．第12地点全景（南）
　　２．第12地点全景（北西）
図版10　遺物　１．土器・陶磁器
　　２．釉薬瓦Ｂ
図版11　遺物　１．燻し瓦－丸瓦凹面
　　２．燻し瓦－丸瓦凸面
図版12　遺物　１．燻し瓦－平瓦凹面
　　２．燻し瓦－平瓦凸面
図版13　遺物　１．釉薬瓦Ａ－丸瓦凹面
　　２．釉薬瓦Ａ－丸瓦凸面
図版14　遺物　１．釉薬瓦Ａ－平瓦凹面
　　２．釉薬瓦Ａ－平瓦凸面

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（１／５万）…… 1
第２図　調査地区位置図（１/5,000）…… 2
第３図　調査地点配置図（１/2,000）…… 3
第４図　第３地点据え方実測図（１/60）…… 5
第５図　第10～12地点断面図（１/60）…… 7
第６図　土器・陶磁器実測図（１／３）…… 8
第７図　第11地点釉薬瓦Ｂ出土状況 …… 9

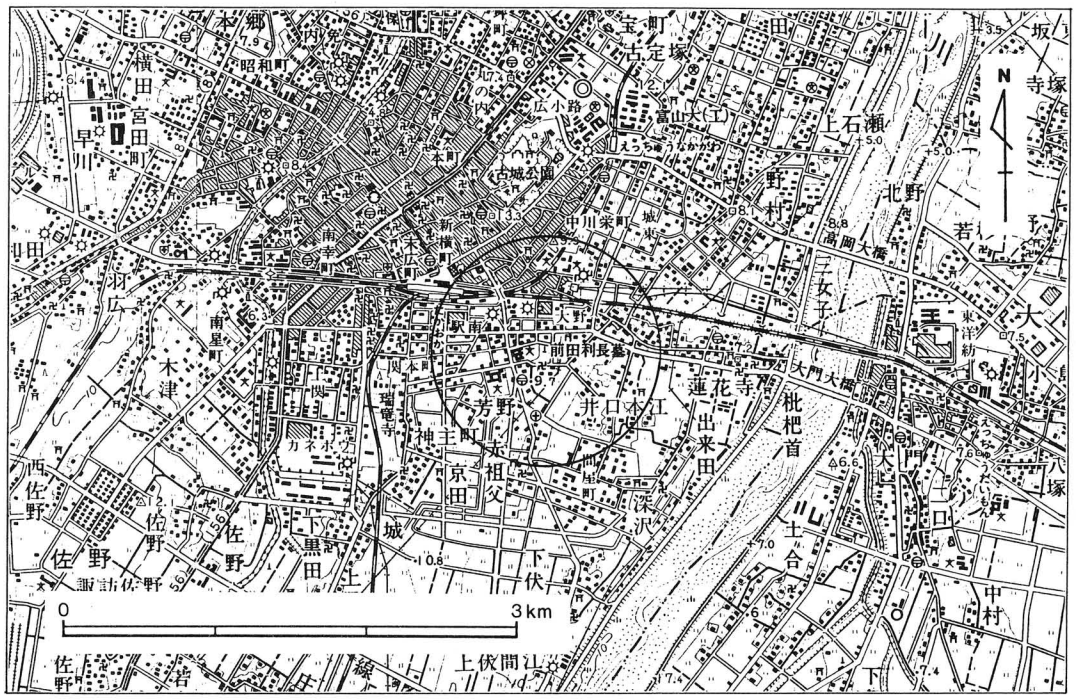
Ⅰ 序　　説

1．遺跡概観

前田墓所は，加賀２代藩主前田利長の廟所である。現在県指定史跡になっている。

前田利長は，慶長14年（1609年）高岡城を築くと共に，城下町を開いた。近世都市高岡の誕生である。慶長19年（1614年）利長は死去し，その遺骸は高岡城の南約1.2㎞の地で火葬に付された。加賀３代藩主前田利常は，利長の33回忌である正保３年（1646年）にこの跡地に利長の廟を造営した。これが前田墓所である。また南接して守家の繁久寺も造られた。これらと同時に，菩提寺の瑞龍寺を東面する大伽藍の寺院への改造，墓所と菩提寺を結ぶ参道の八丁道の築造も行われた。

前田墓所は，２重の堀で囲まれ，墓域が約５万坪あったと伝えられている。明治維新以後荒廃し，明治42年に至り，第16代前田利為は敷地の拡張を出願し，大修復を施した。この時，9,500坪の墓地としたとされる。戦後，他の施設のため縮小し，現在は 3,300坪（１万㎡）を計るにしか過ぎない。



第１図　遺跡位置図（1/5万）

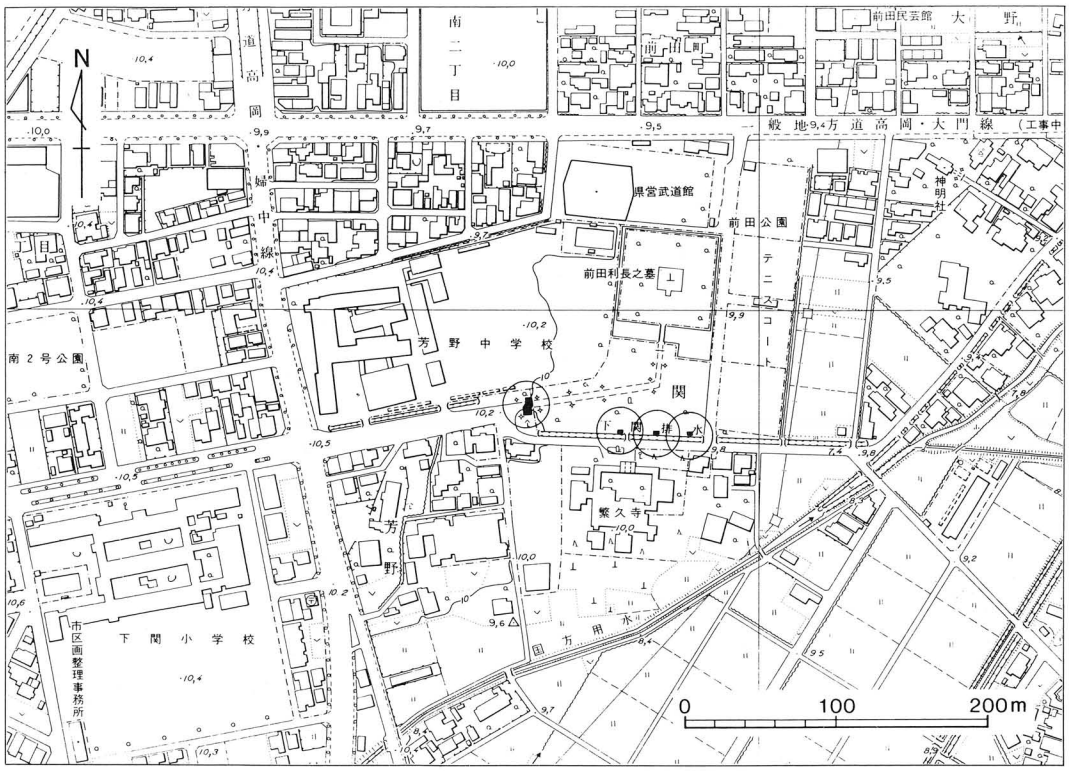
2．調査経過

高岡公共下水道事業の下関雨水幹線は，八丁道の東寄り，八丁道と主要地方道－高岡・婦中線の交差点より，八丁道を縦断して前田墓所の南側を通り，地久子川へ至るものである。総延長は約 550ｍを計る。当雨水幹線埋設予定地は現在も水路となっている所である。

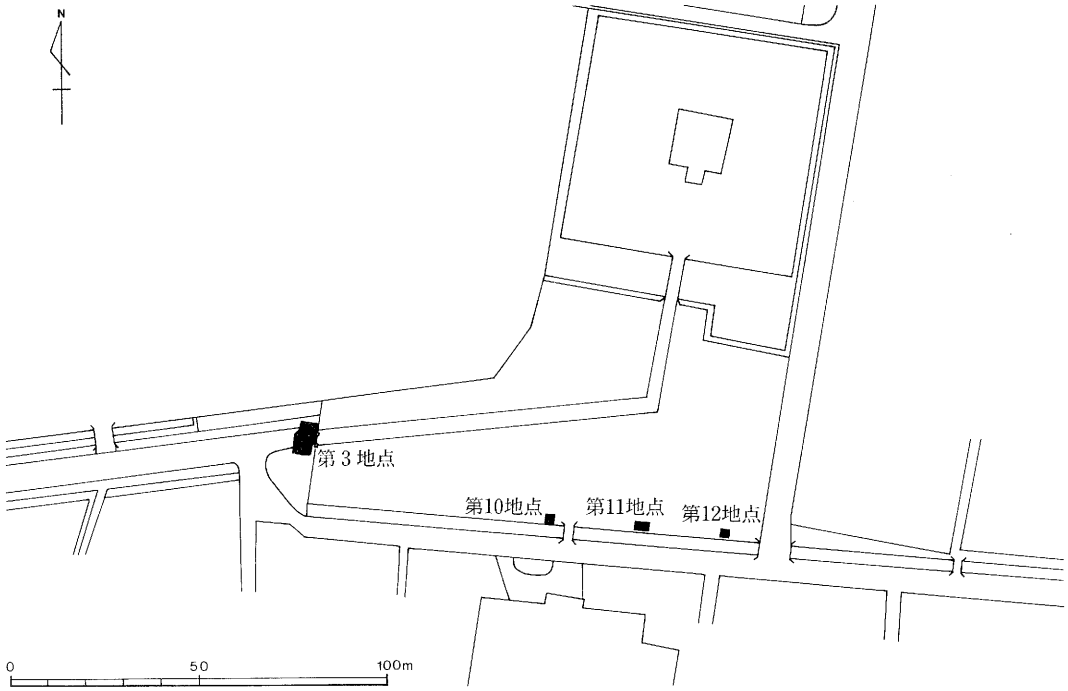
事業地域内の前田墓所の南側を流れる用水に沿って残っている石垣は，その外堀を偲ばせるものである。一方八丁道は由緒ある道筋として，歴史的景観を整備する事業が昭和61年度から実施されていた。このようなことから，当事業を下水道水緑景観モデル（ウォータースクウェア・プラン）とし，八丁道の整備事業と共に，歴史的景観形成を図る事業として実施に移された。

この事業計画は，暗渠の雨水幹線とその上方に農業用水として利用できる開渠の雨水枝線を布設するもので，昭和63年度に暗渠工事を行い，昭和64年度（平成元年度）に開渠工事及び歩道設置工事を行うものであった。

発掘調査の方も，この事業計画に合わせて，昭和63年度に暗渠工事部分を，昭和64年度（平成元年度）に開渠工事及び歩道設置工事部分を実施することになった。



第２図　調査地区位置図（１/5,000）



第３図　調査地点配置図（１/2,000）

昭和63年度の発掘調査は『前田墓所遺跡調査概報Ⅰ』（1989年、高岡市教育委員会刊）に記した通りである。調査地点は９箇所で，西から東へ第１地点から第９地点までである。第１・２地点は芳野中学校南側の八丁道内である。第３地点は前田墓所参道入口付近である。重要な地点と判断したので，他の地点より調査面積を多くした。第４～６地点は前田墓所の南側である。第７～９地点は前田墓所の南東側である。この調査では，第３地点において，据え方＝礎石が検出されると共に，土層断面の観察より造成の様相を明らかにすることができた。

本年度の工事計画には，前田墓所南側の石垣の修復が入っていたので，この部分の調査が主要なものとなった。昭和63年度の発掘調査では，第４～６地点として前田墓所南側の道路敷部分を調査したので，これと対面の石垣部分の調査を企図したが，樹木等のため，若干違った位置とせざるを得なかった。第10～12地点としたものである。前田墓所南側の中央，中央東寄り，東端の配置である。また第３地点の調査を再び行った。据え方＝礎石が検出された部分を中心に調査を実施し，前田墓所側へ調査範囲をできる限り拡張した。

発掘調査は，平成元年６月１日から６月21日までおこなった。実働日は13日間である。調査対象面積は 570㎡を計り，発掘調査面積は62.3㎡となった。

なお，その後開渠部分が下関第２雨水幹線と命名されたので，副題等でこの名を用いた。

II 遺　　構

1．第3地点

現八丁道の東端部，前田墓所の西側入口手前である。八丁道と墓所の取り付け部分である。昨年度（昭和63年度）の調査で，据え方（礎石の据え方）群が検出された地点である。この調査では調査地区設定の都合で，据え方群の全体を検出できなかったので，今回の調査で発掘区を東側へ拡張した。昨年度の調査で検出した部分の再調査と拡張部分の調査で，据え方群全体の検出を目指した。発掘面積は45.8㎡となった。

現在の路面下の最新の盛土層（第1層）を約50cm除去すると旧造成土と考えられる土層が表れた。据え方群を横断及び縦断するラインで土層断面図を作成した。横断面は昨年度のものより，やや東方で設定した。横断，縦断面とも昨年度の土層に準拠して観察を行った。土層は大きく7つに分類される。

1．A－旧表土や八丁道造成以前の堆積土，B－八丁道初期の造成土，11～14。

2．据え方内の埋め土，礎石や礫を含んでいる，21～27。

3．1・2期以後の造成土，据え方を覆っている，31～33。

4．石垣を伴う造成段階，41～50。

7．最新の盛土層，71。

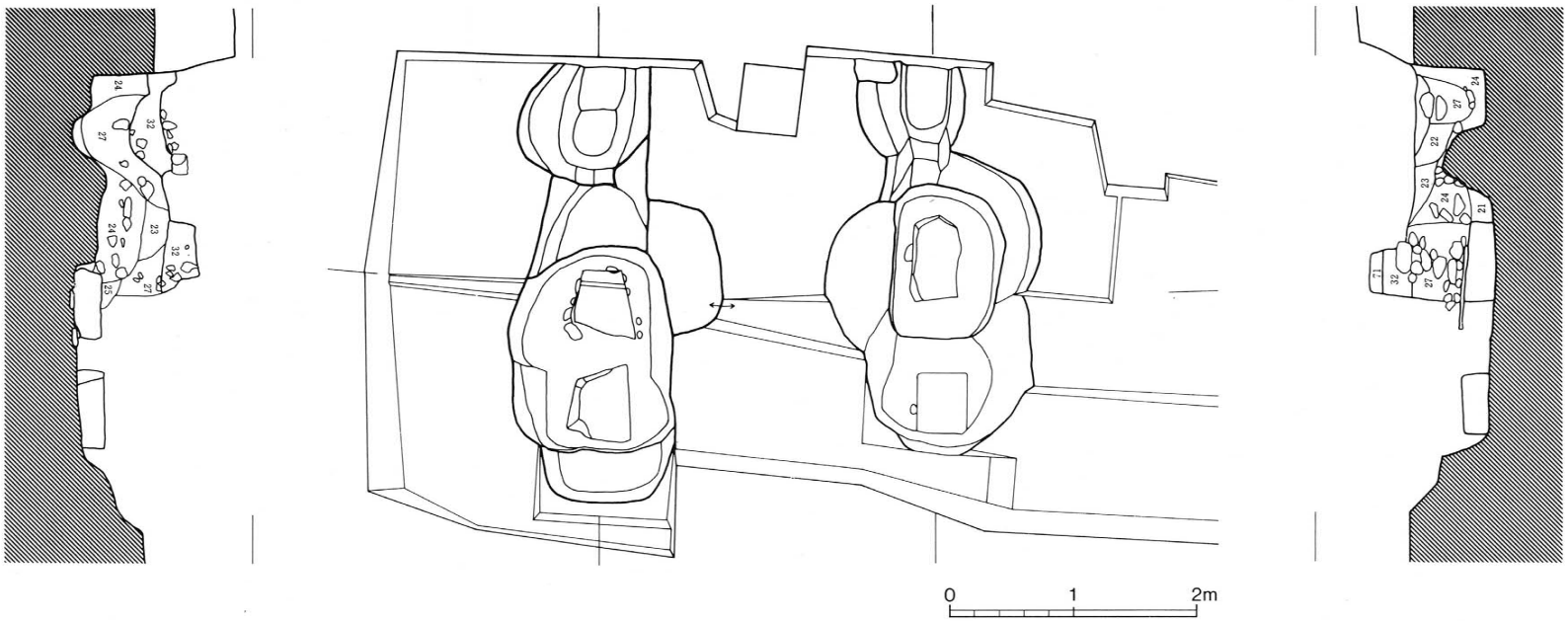
大分類の第5・6層は，今回検出部分には，認められなかったので省いてある。また，上記した小分類の中で，今回存在しなかったものもある。基盤層は淡青緑色砂質土層で，据え方群付近の高い部分では淡黄白色砂質土層となっている。

据え方群は北群と南群の2つのグループがある。それぞれ西側から東側へ，すなわち八丁道から墓所方向へ，a礎石の据え方，b礎石の据え方，c掘立柱になると考えられる掘り方の3つの穴から成り立っている。これら北と南のa．b．cは組み合うものである。

礎石据え方はaとbが一部重複しているので，正確な規模を分明にできないが，それぞれ一辺約 120cmの隅丸方形の平面形になると解釈される。土層断面から判明する深さは約80cmで，現在の路面上から底面までは約 120cmを計る。礎石は，短辺約40cm，長辺50～70cm，厚さ20～25cmを計る偏平な砂岩質の石材である。据え方bでは，礎石を据えるための小礫が置かれていた。また南側据え方bでは，礎石の上に板が置かれていた。

cとした掘り方は，東端部が調査地区外となり，全体を検出することができなかったが，8割ほど検出したと考えている。規模は，径90～110cm，深さ約80cmをはかる。

縦断面は，bの据え方の途中から，cの掘り方にかけて設定したのみであるので，aの据え方とbの据え方との新旧関係は不明である。bとcではcの方が新しいと観察された。



13．暗赤褐色粘質土
14．黒色粘質土

31．黒灰色粘質土
32．暗灰褐色砂質土

47．暗灰褐色砂質土
48．灰褐色砂質土

71．砂礫層（最近の盛土）

21．淡青緑色砂質土ブロック
22．黒灰色粘質土・
　淡青緑色砂質土混合土
23．暗褐色粘質土・
　淡黄白色砂質土混合土
24．暗灰色粘質土・
　淡黄白色砂質土混合土
25．暗灰色粘質土・
　淡青緑色粘粒混り
27．暗灰色粘質土

第４図　第３地点据え方実測図（１/60）

2．第10地点

現前田墓所南端の中央部である。発掘面積は４㎡（幅２ｍ，長さ２ｍ）である。この第10地点及び第11・12地点における基本層序は，以下のとおりである。

第Ⅰ層．暗褐色砂質土，現表土。

第Ⅱ層．灰褐色砂質土，やや粘質，粘土ブロックを含む。造成土。

第Ⅲ層．灰色粘質土，旧堆積土。

第Ⅳ層．暗灰色粘質土，旧堆積土。

第Ⅴ層．淡緑灰色砂層，基盤層。

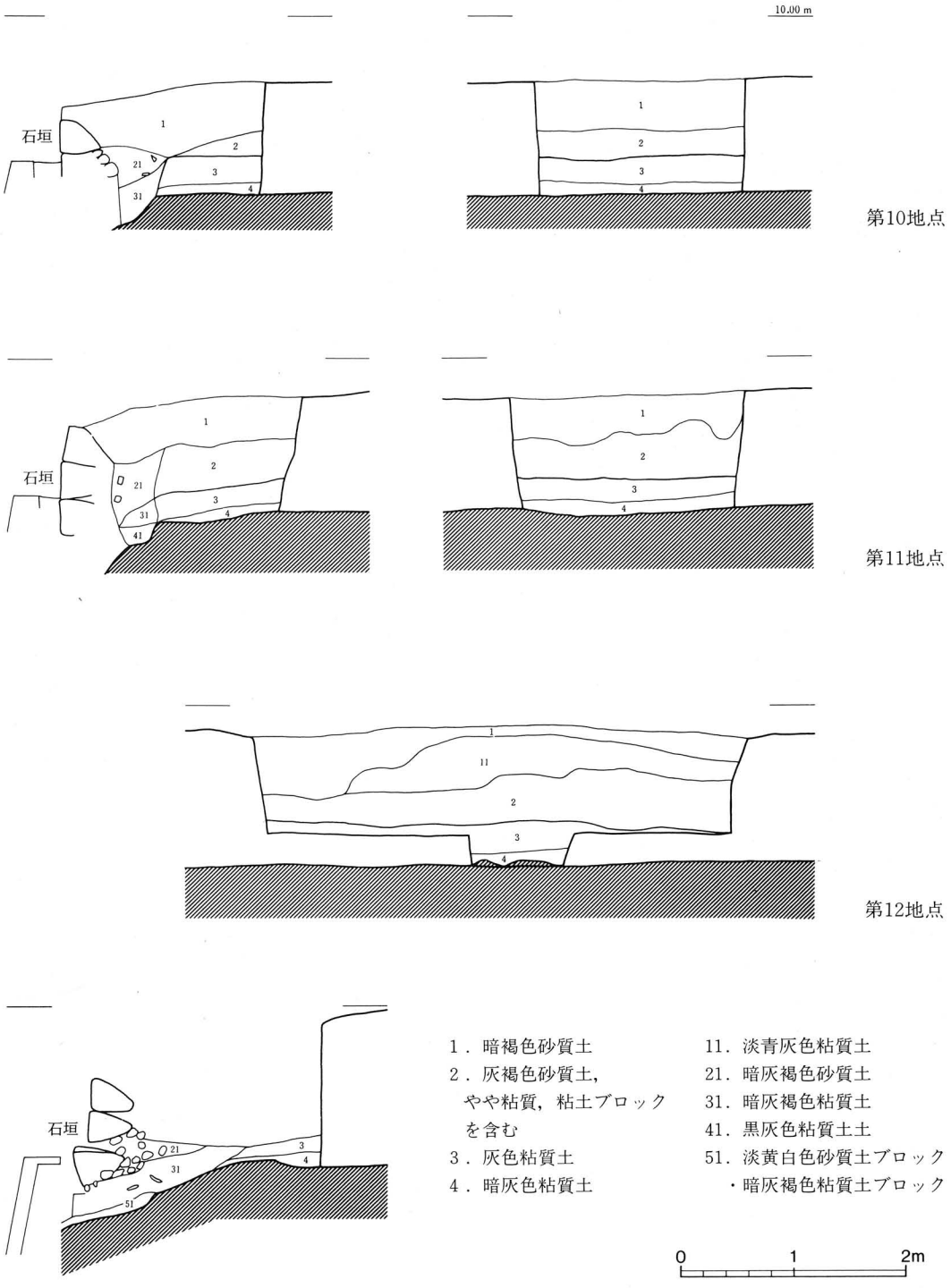
土層は基本層序どおりであるが，石垣の付近では違っていた。これは石垣の裏込めとして，小礫等を充填しているためである。石垣は外面から３段に積まれている様子が確認できる。このトレンチでは，石垣の切断調査を実施しなかったが，裏込め部分の状態より，３段位の石垣であると推定できる。

3．第11地点

現前田墓所南端の中央東寄りである。発掘面積は９㎡（幅２ｍ，長さ 4.5ｍ）である。このトレンチでは，中央部に南北方向で深掘りのサブトレンチを入れ，断面の観察を行った。石垣は，間知石を３段に積み，裏込めとして小礫を充填するものである。第１段目の間知石の下部には，胴木が置かれていた。また，石垣の下方の土層である暗灰褐色粘質土には，燻し瓦，釉薬瓦（部分釉薬瓦）の破片が入っており，石垣の構築時期を示す資料となっている。土層は上述の基本層序に準じるものであるが，第Ⅰ層の現表土の下には，淡青灰色粘質土が20～50cmの厚さで堆積していた。造成土と考えられる。また，トレンチの北端部は，土層がやや乱れていた。これは，樹木の影響と思われる。

4．第12地点

現前田墓所南端の東端部である。発掘面積は４㎡（幅２ｍ，長さ２ｍ）である。土層は基本層序どおりであるが，石垣の付近では違っていた。これは石垣の裏込めとして，小礫等を充填しているためである。他の地点と同様である。裏込め部分には，白磁と伊万里系磁器の細片が入っており，これも石垣の構築時期を示す資料となっている。なお，石垣はこの付近では２段となっていることが外面より確認できる。切断調査を実施しなかった。



第５図　第10～12地点断面図（１/60）

Ⅲ 遺　　物

1．遺物の出土状態

遺物は，少量の土器・陶磁器と整理箱４個分の瓦である。第６図で示した土器・陶磁器は，昨年度の調査で出土したものも含んでいる。瓦は，第12地点から一番多く出土した。後述の出土位置の内，出土位置を明示していない瓦は，この第12地点のものである。

第１地点；101,昨年度出土。

第３地点；102.103.106,昨年度出土。

第10地点；104.230，230は石垣の間。

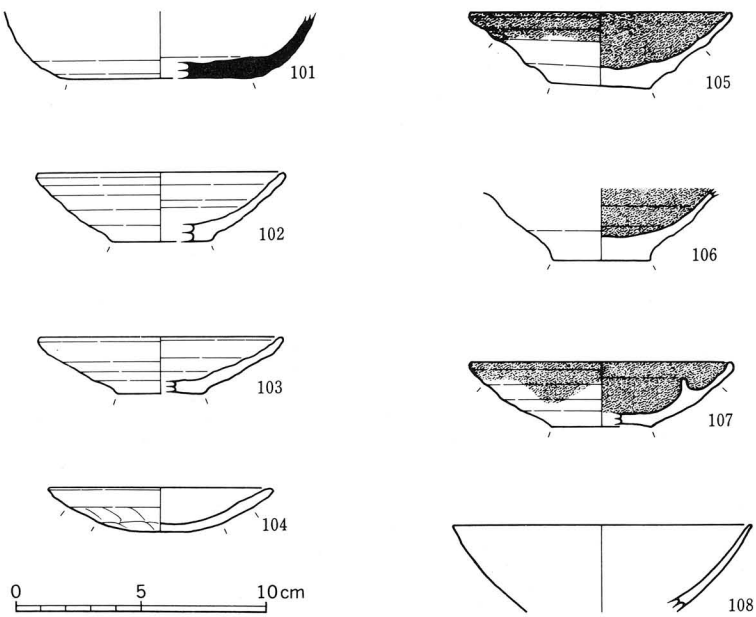
第11地点；105.108，瓦の内,204.210.213.218.229は石垣の裏込め部分，231は石垣の間。

第12地点；107.206.222。

2．土器・陶磁器

第６図と図版10－１で示した 101～108 である。

101 ；奈良～平安時代前期の須恵器である。底部はヘラ切りである。焼成はやや悪く，灰褐色を呈する。



第６図　土器・陶磁器
実測図（1/3）

第７図　第11地点
釉薬瓦Ｂ出土状況

102 ～ 104 ； 中・近世の土師器の皿，102.103 はロクロ使用，104 は非ロクロである。

105 ～ 107 ； 越中瀬戸の椀・皿。

108 ；伊万里系磁器の椀。

３．瓦

燻し瓦（図面１・２，図版11・12）

燻し焼きによる瓦である。形態的にはすべて本葺き瓦であり，桟瓦はない。丸瓦と平瓦が出土している。色調は黒色・黒灰色を呈する。銀化しているものや燻しが不十分で灰色等を呈するものもある。図示したものは，201 ～ 207 が丸瓦，208 ～ 214 が平瓦である。比較的残りがよい丸瓦 201 は，丸瓦部幅16cmを計る。また，全長の判る平瓦では，213 が 30cm，214 が 28cmを計る。211．212 は押印のある平瓦である。両方と小口に角に「上」である。

釉薬瓦Ａ（図面３・４，図版13・14）

釉薬の掛かっている瓦の内，一部分を施釉するものを釉薬瓦Ａとした。燻し瓦同様，形態的にはすべて本葺き瓦であり，桟瓦はない。丸瓦と平瓦が出土している。後述の釉薬瓦Ｂと違い近世の瓦と考えている一群である。

釉薬瓦Ｂ（図版10－２）

釉薬の掛かっている瓦の内，全面を施釉するものを釉薬瓦Ｂとした。燻し瓦や釉薬瓦Ａと違い桟瓦である。近代の所産と考えているもので，黒黝色の釉薬が付き，現在多く見られる瓦と同様なものである。図示した内，231 は隅瓦である。

Ⅳ 結　　語

前田墓所参道付近

第３地点は，墓所への西側から，すなわち八丁道側からの入口部となっている所である。昨年度の調査に基づき，この付近における造成の様相を，以下の通りに明示した（高岡市教育委員会『前田墓所遺跡調査概報Ⅰ』）。

ａ．旧表土と考えられる暗赤褐色粘質土層の上に黒色粘質土を盛って造成。参道幅は 7.5m となる。

ｂ．黒灰粘質土・暗灰褐色砂質土・黒灰砂質土を盛って造成。旧参道の上面を覆い，北側へ約 2.5m拡幅。参道幅は10ｍとなる。

ｃ．石垣を伴う段階，灰褐色砂質土等を盛って造成。南側へ約４ｍ拡幅し，南端部には石垣形成。参道幅は14ｍとなる。

この段階では，礎石がａの段階に伴うものと推定していた。今回の調査では，やや不十分ながら，据え方＝礎石を新旧の２時期としたので，新しい方は，ｂの段階に伴うものである可能性が出てきたと言える。

前田墓所南側石垣付近

第11～13地点の調査から解釈される，墓所やその南側石垣の構築の様相について述べてみる。墓所の内側へ調査地区を拡げていないので，明確ではないが，第Ⅱ層とした灰褐色砂質土は，粘土ブロックを含み，人為的に盛ったもの，すなわち墓所造成を示すものと考えた。また，石垣については，石垣の間から出土した釉薬瓦より，近代の所産と推断される。

前田墓所の変遷

墓所の変遷とも係わる八丁道の変遷については，昭和62年度の調査結果より以下の通りに示した（高岡市教育委員会『八丁道遺跡調査概報Ⅰ』）。

第Ⅰ期八丁道；江戸時代前期，黒色粘質土層の上に灰黒色粘質土を盛って造成。

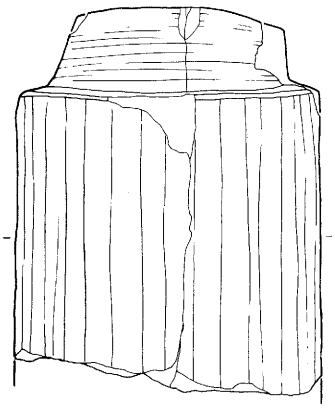
第ⅡＡ期八丁道；江戸時代末期から明治時代，北側へ拡幅，灰色砂質土を盛って造成。

第ⅡＢ期八丁道；明治時代末期から大正時代初期，道路の両側を石垣で改修。

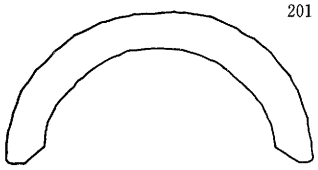
第Ⅲ期八丁道；昭和時代＝戦後，砂礫を盛って造成。

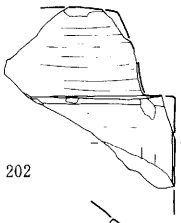
第３地点のａ～ｃの段階は，八丁道の第Ⅰ期～第ⅡＢ期の段階に対応するものと判断される。

第11～13地点の石垣については，第３地点のｃの段階で，八丁道の第ⅡＢ期の段階に対応するものと解釈しておきたい。つとに指摘したように，この段階は，明治時代末期から大正時代初期に当たり，第16代前田利為による墓所の敷地拡張出願と大修復，瑞龍寺による八丁道の買戻しと地目変更，皇太子（大正天皇）の行啓，古城公園や八丁道等の整備，と言った一連の動きの中で理解できるものである。

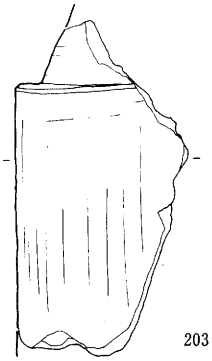


201

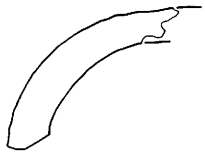


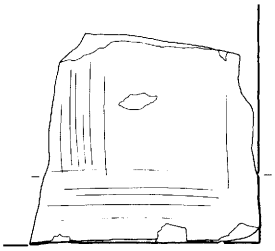


202

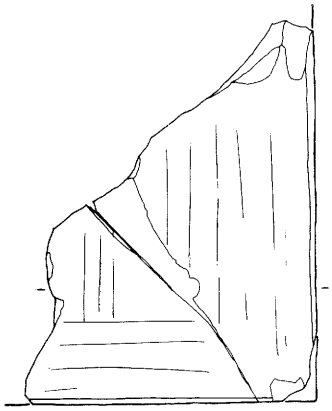


203

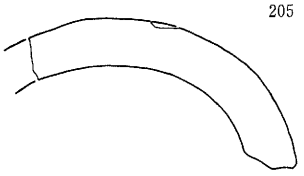


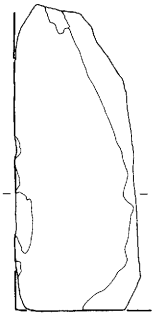


204

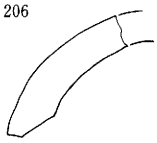


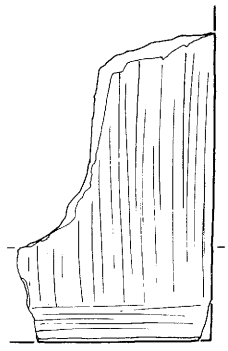
205



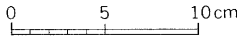


206





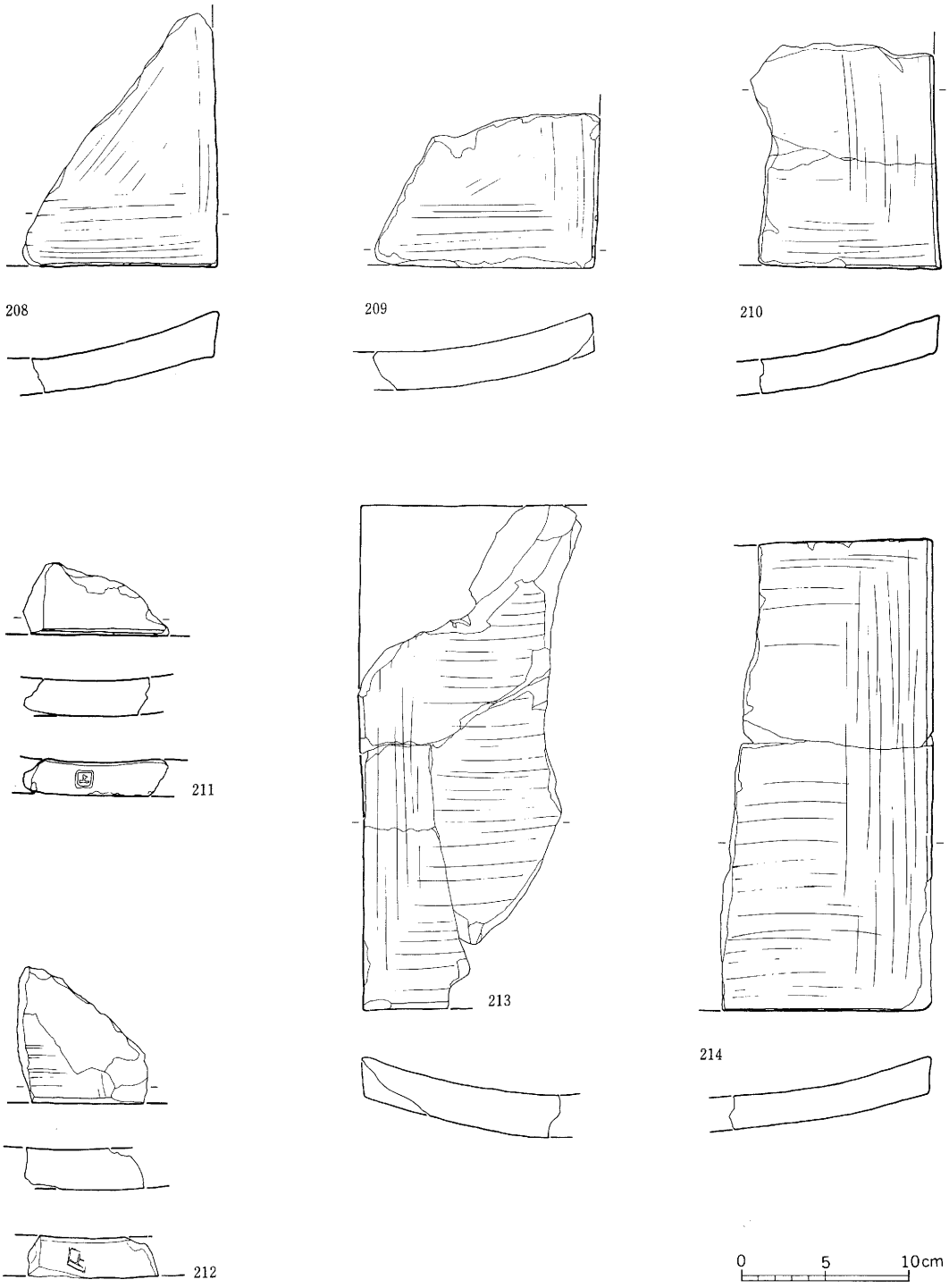
207



燻し瓦－丸瓦

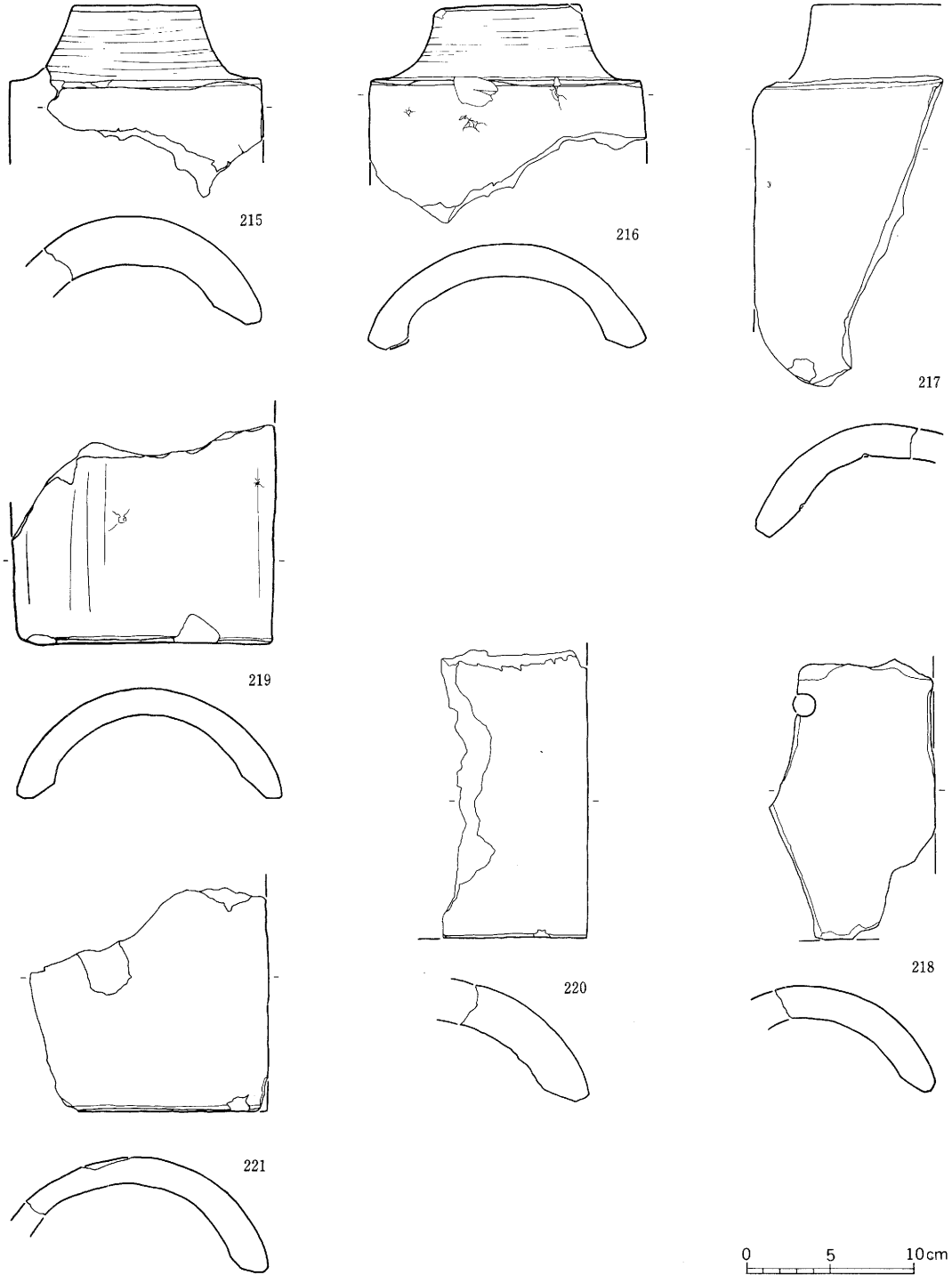
縮尺 1/4

図面二　遺物実測図



燻し瓦－平瓦

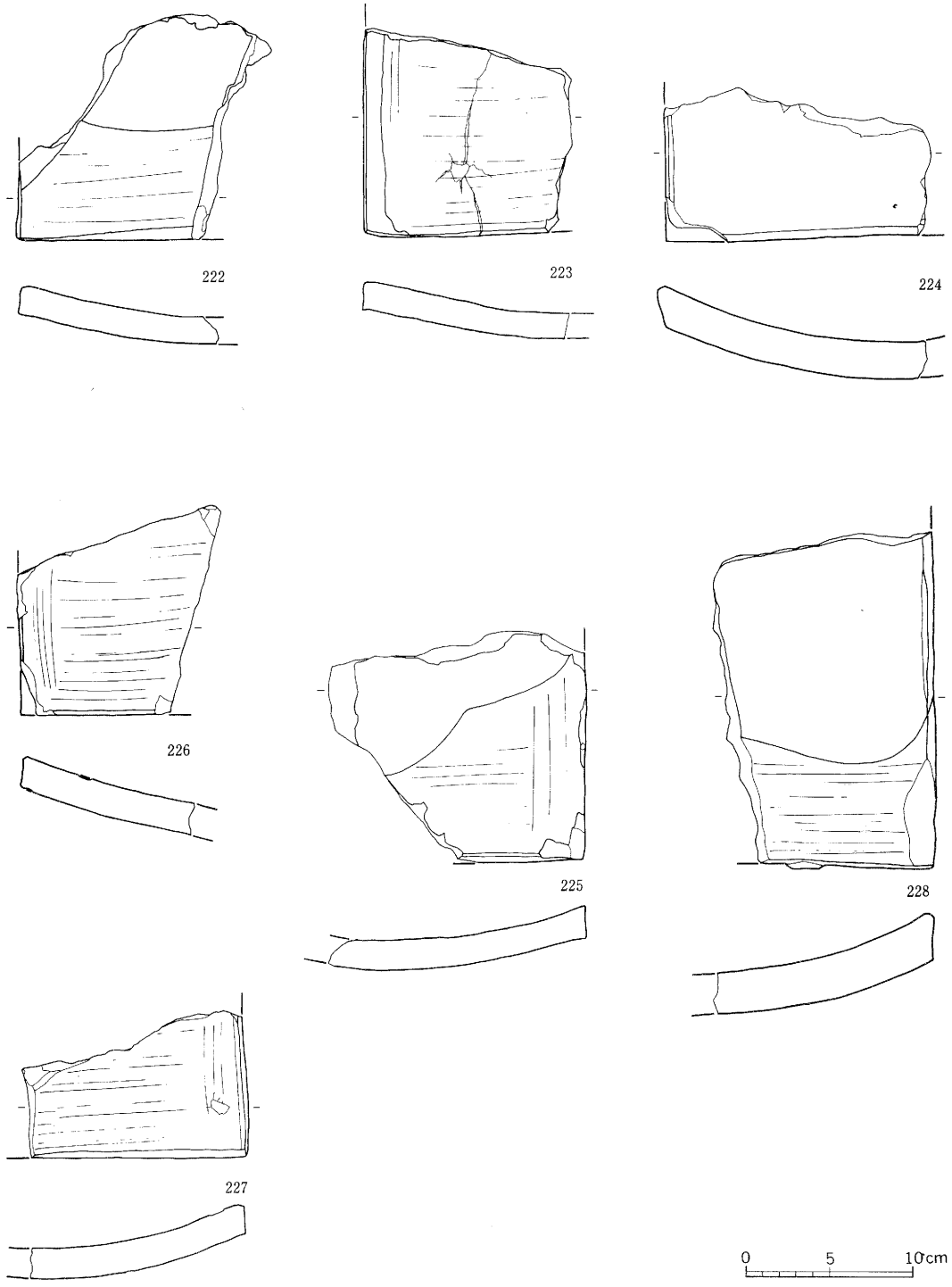
縮尺 1/4



釉薬瓦Ａ－丸瓦

縮尺 1/4

図面四　遺物実測図



釉薬瓦Ａ－平瓦

縮尺 1/4

1．石垣西側（南西）

2．石垣東側（南西）

1．第3地点遠景（南西）

2．第3地点遠景（西）

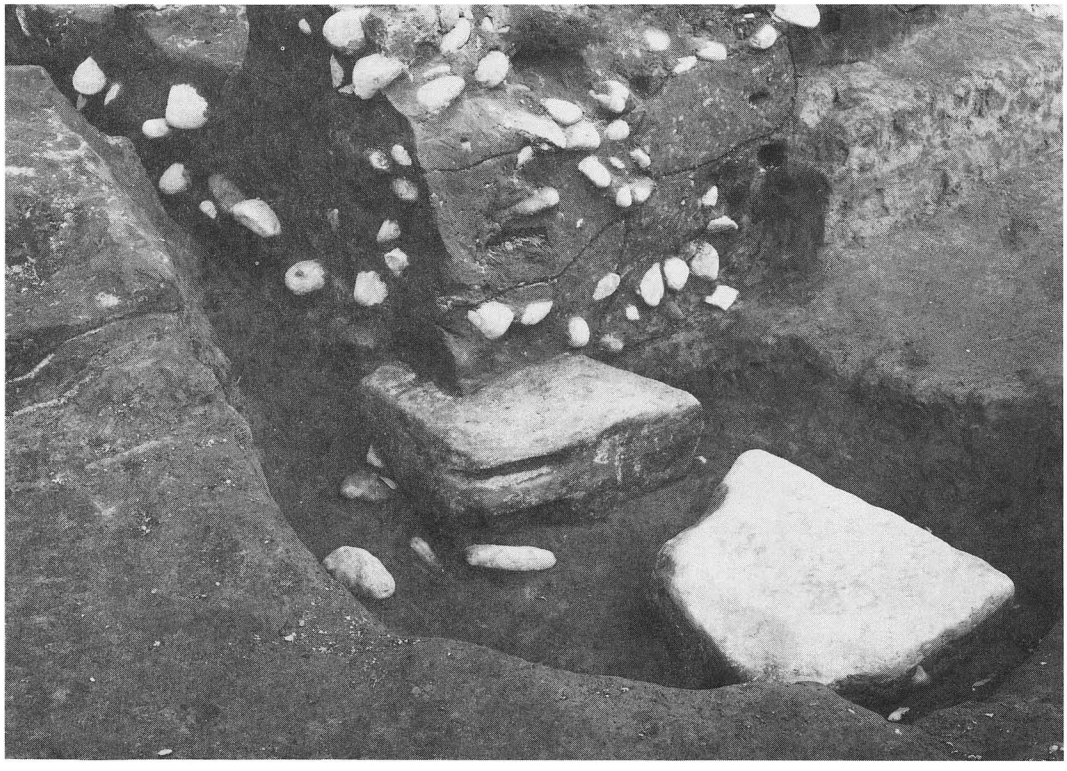
1．第３地点全景（西）

2．第３地点全景（南）

1．第３地点北側据え方全景（南西）

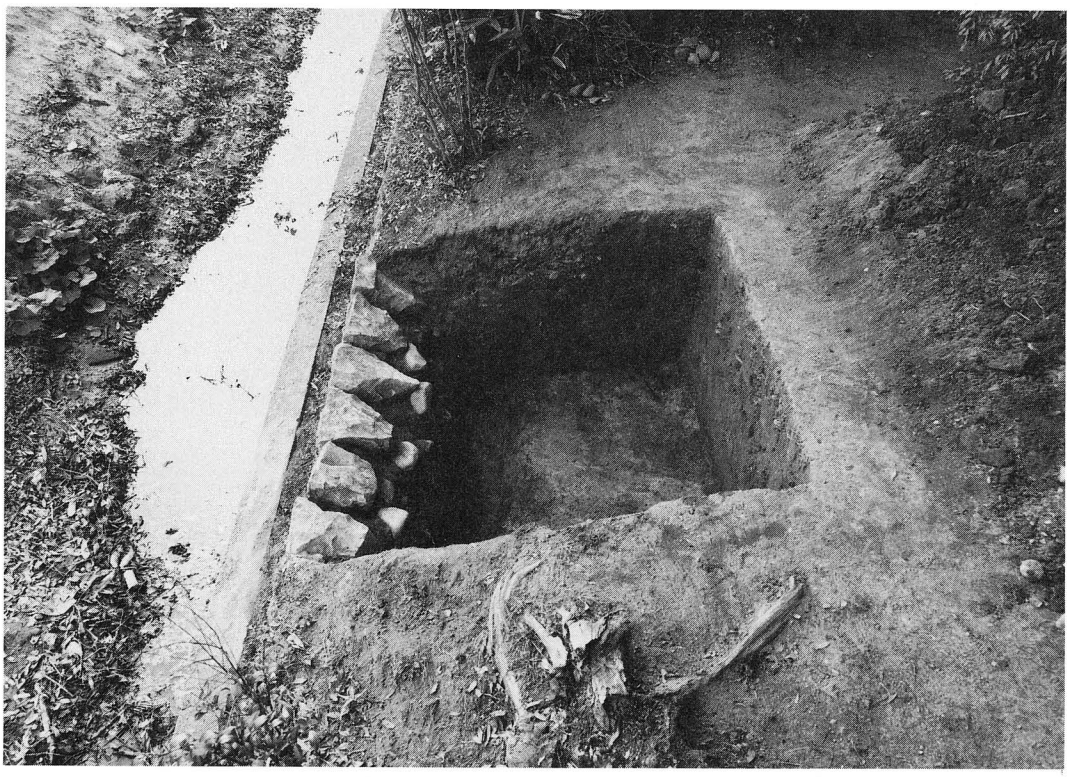
2．第３地点南側据え方全景（北西）

1．第３地点北側据え方近景（南西）



2．第３地点南側据え方近景（北西）

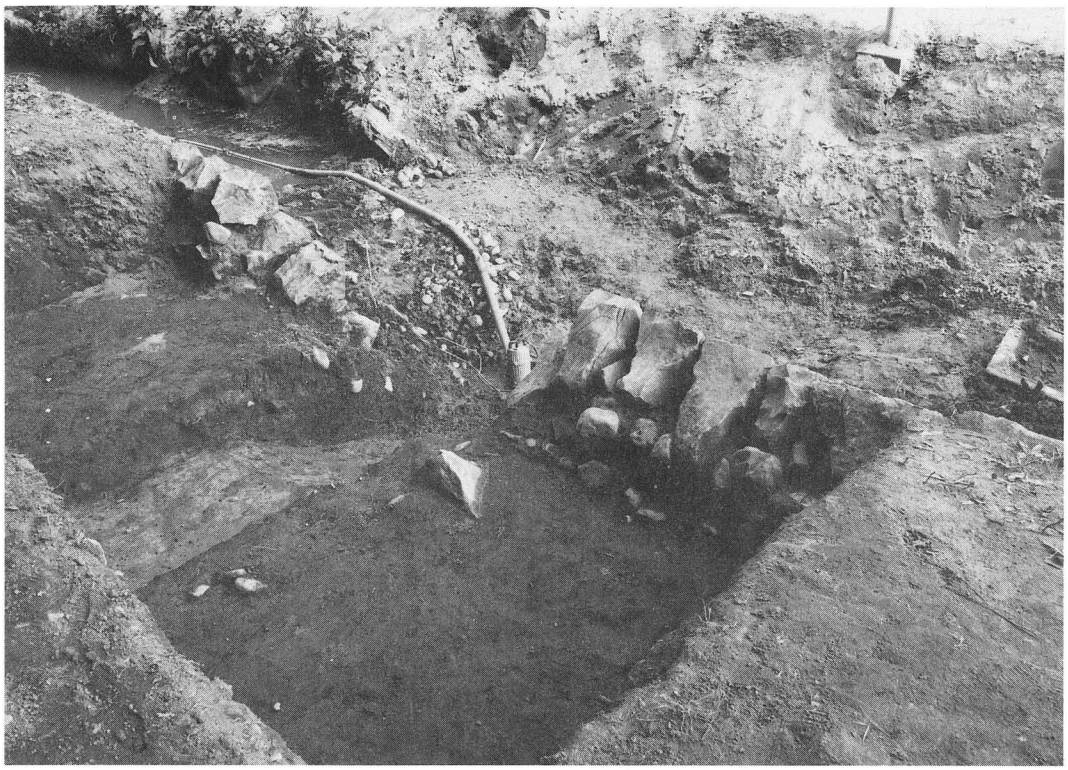
1．第10地点全景（南）



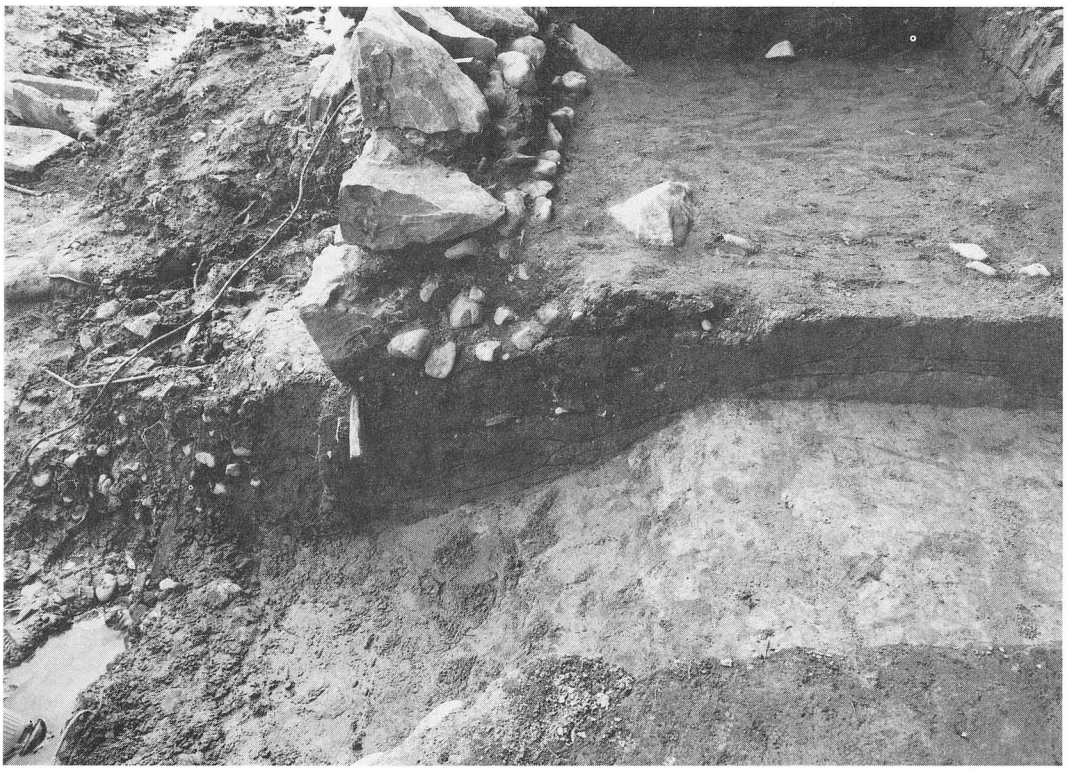
2．第10地点全景（東）

1．第11地点全景（南）

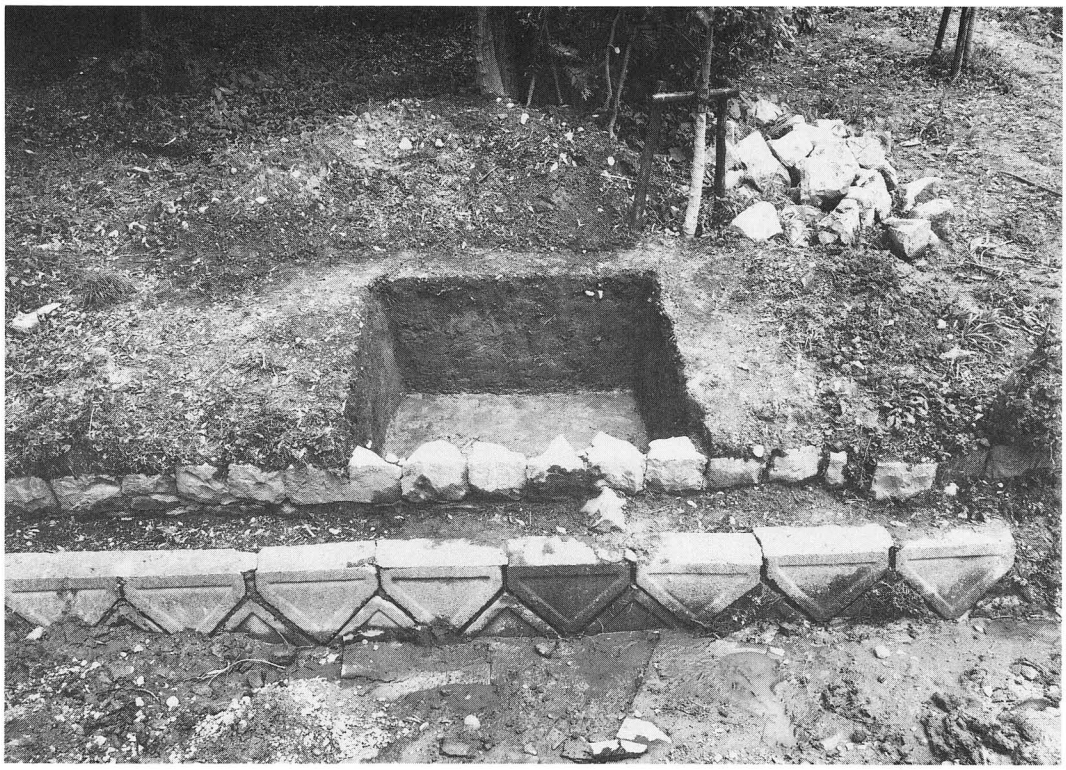
2．第11地点全景（西）



1．第11地点近景（北西）

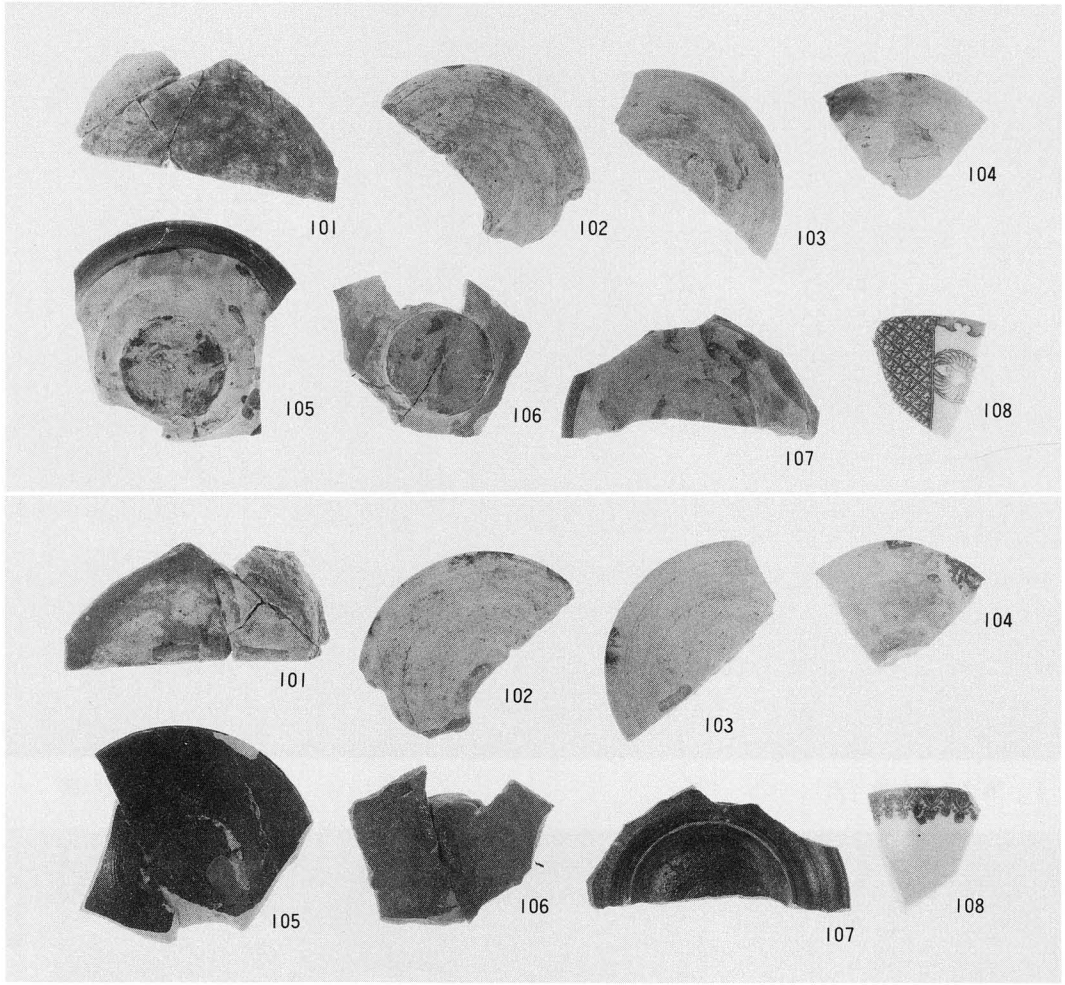


2．第11地点断面（東）

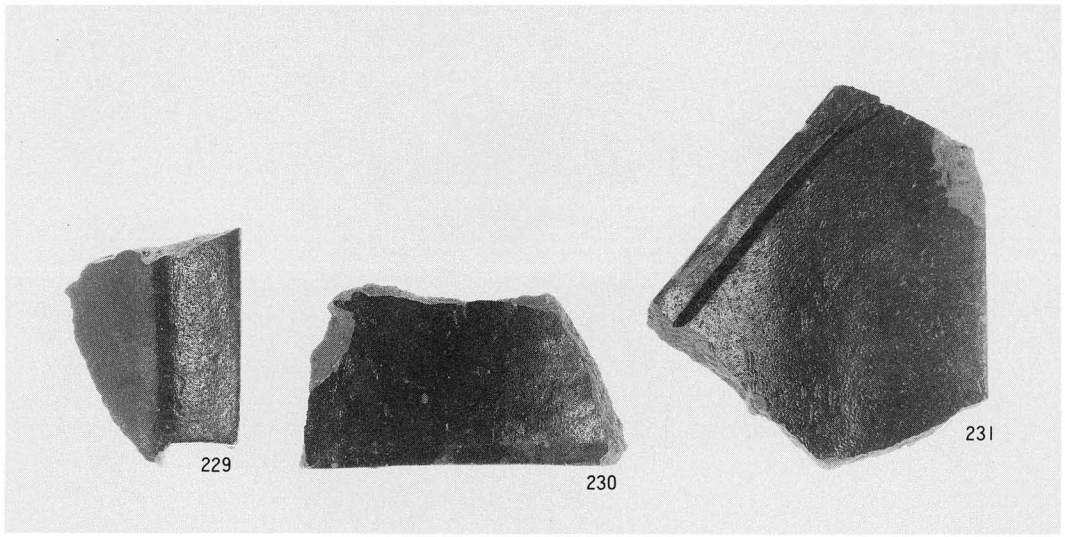


1．第12地点全景（南）

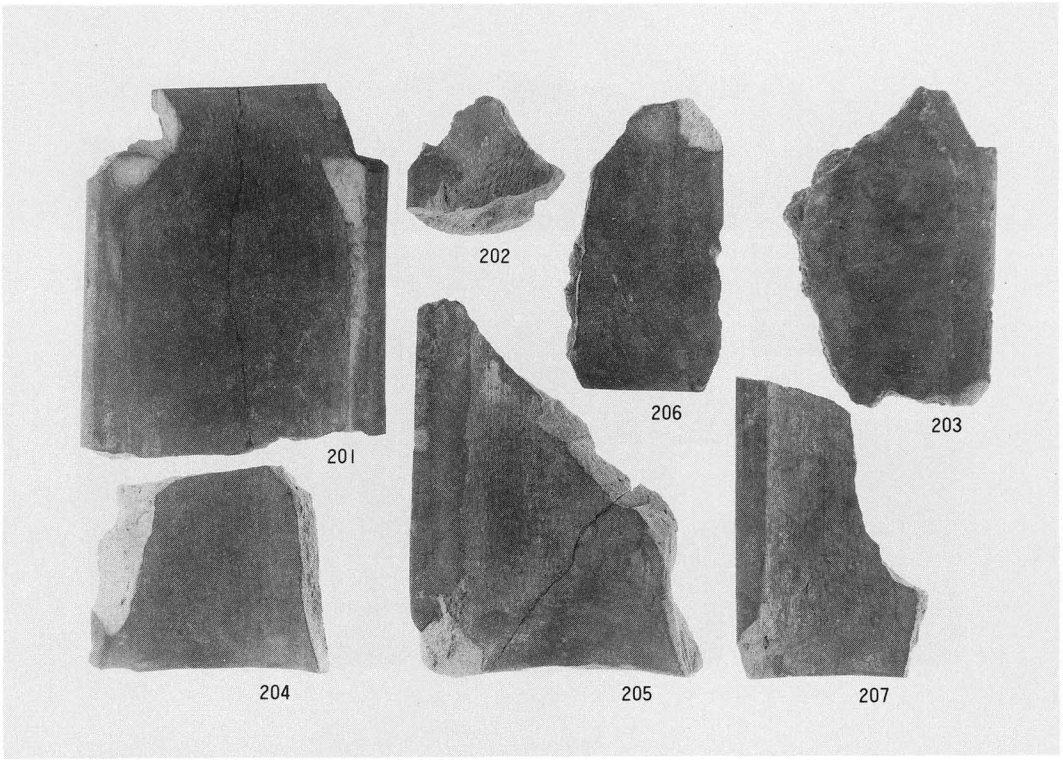
2．第12地点全景（北西）



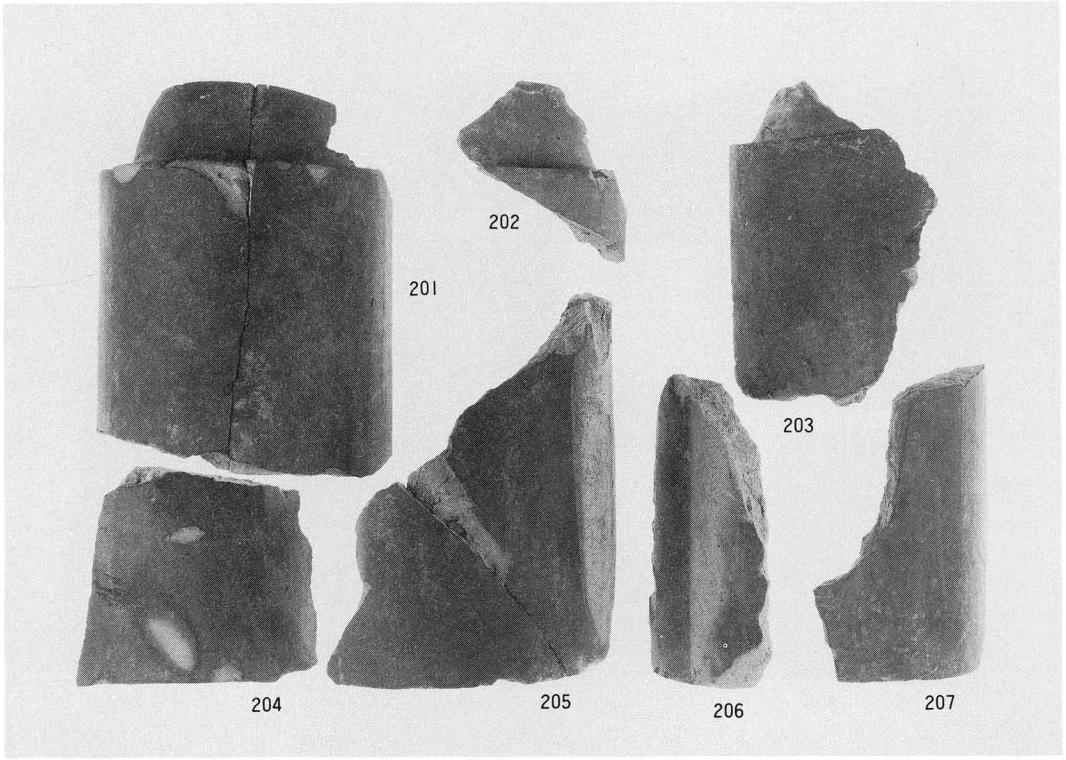
1．土器・陶磁器



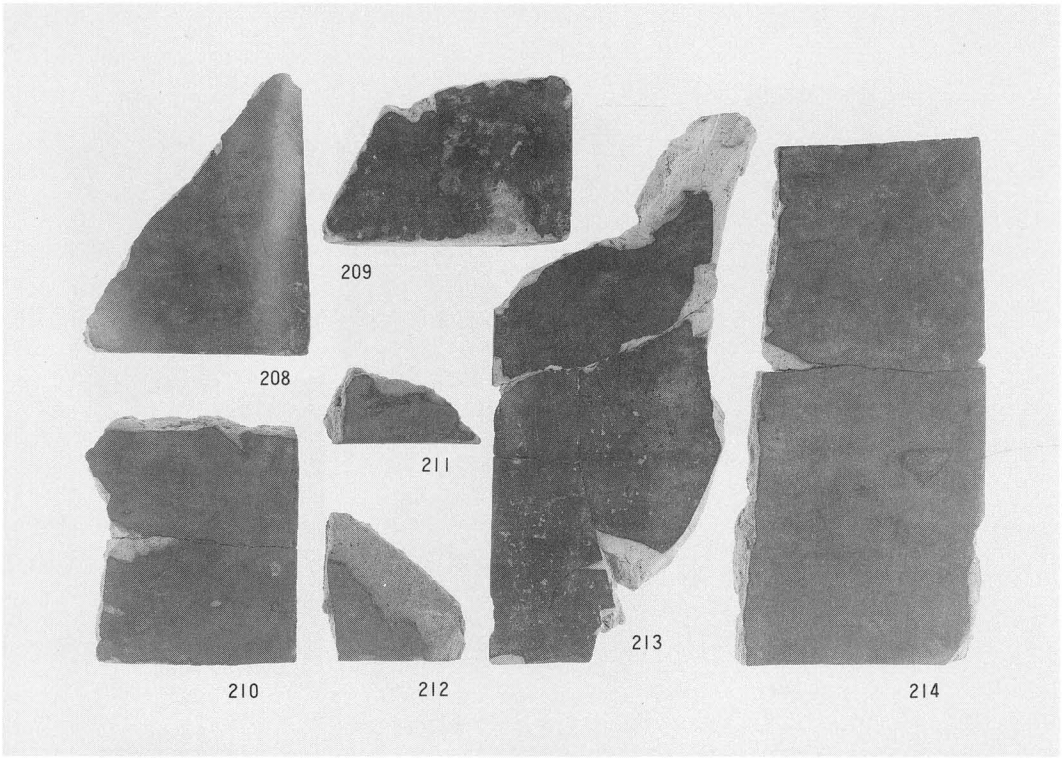
2．釉薬瓦B



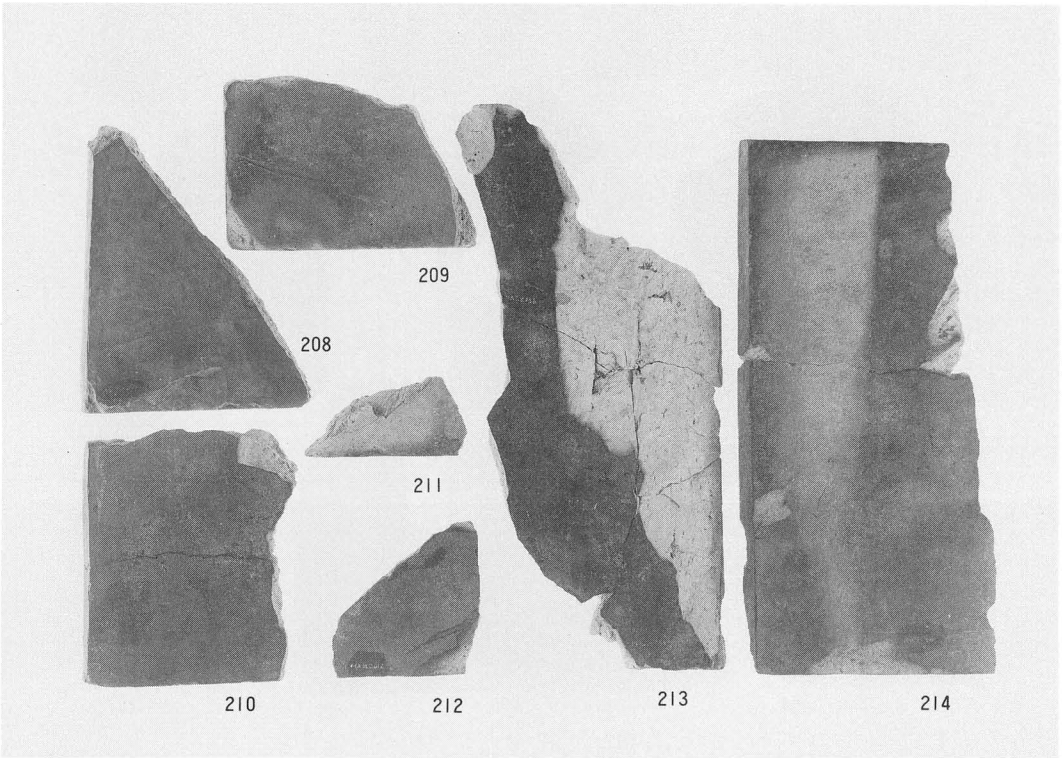
1．燻し瓦－丸瓦凹面



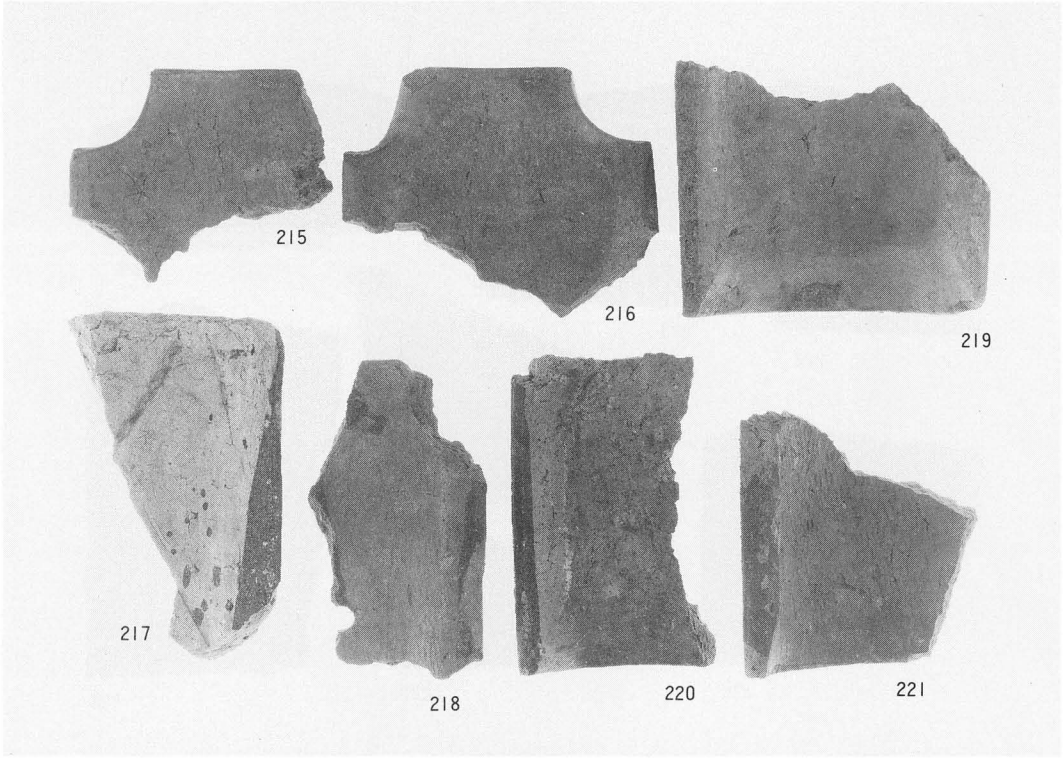
2．燻し瓦－丸瓦凸面



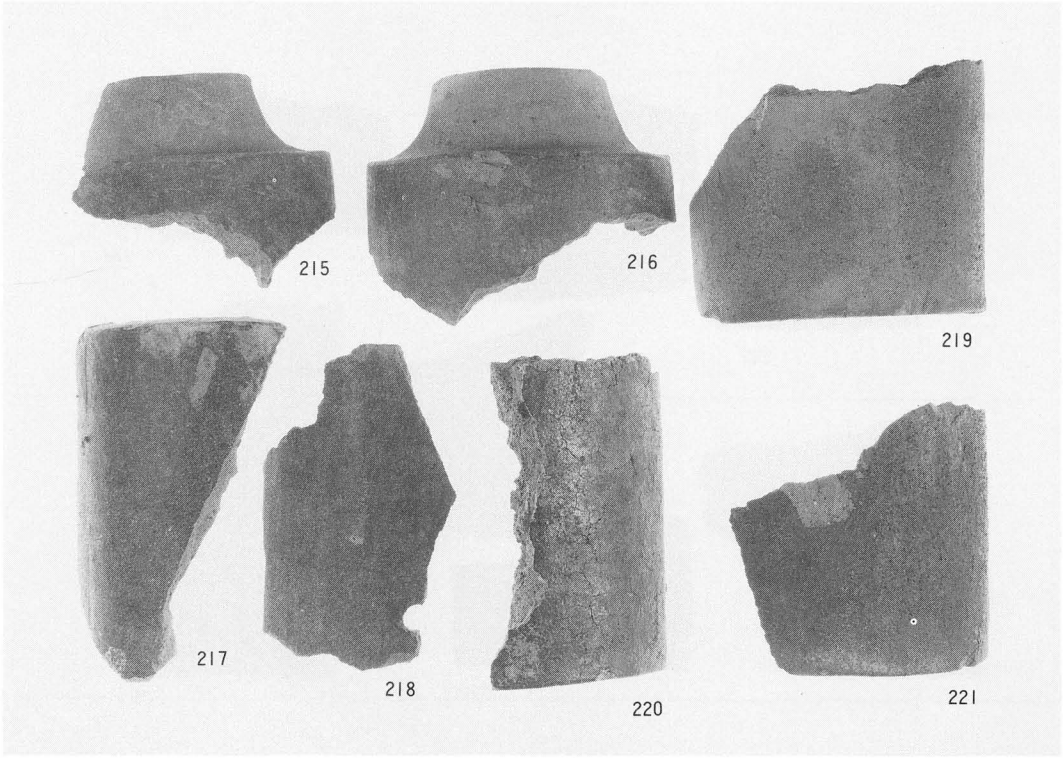
1．燻し瓦－平瓦凹面



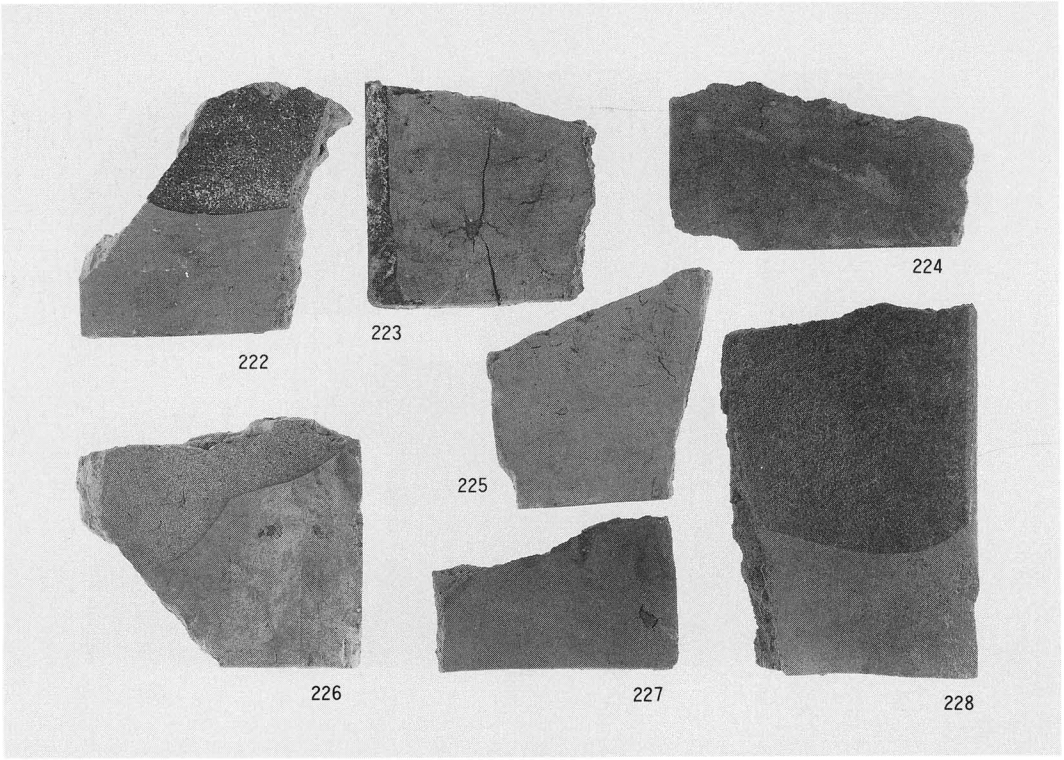
2．燻し瓦－平瓦凸面



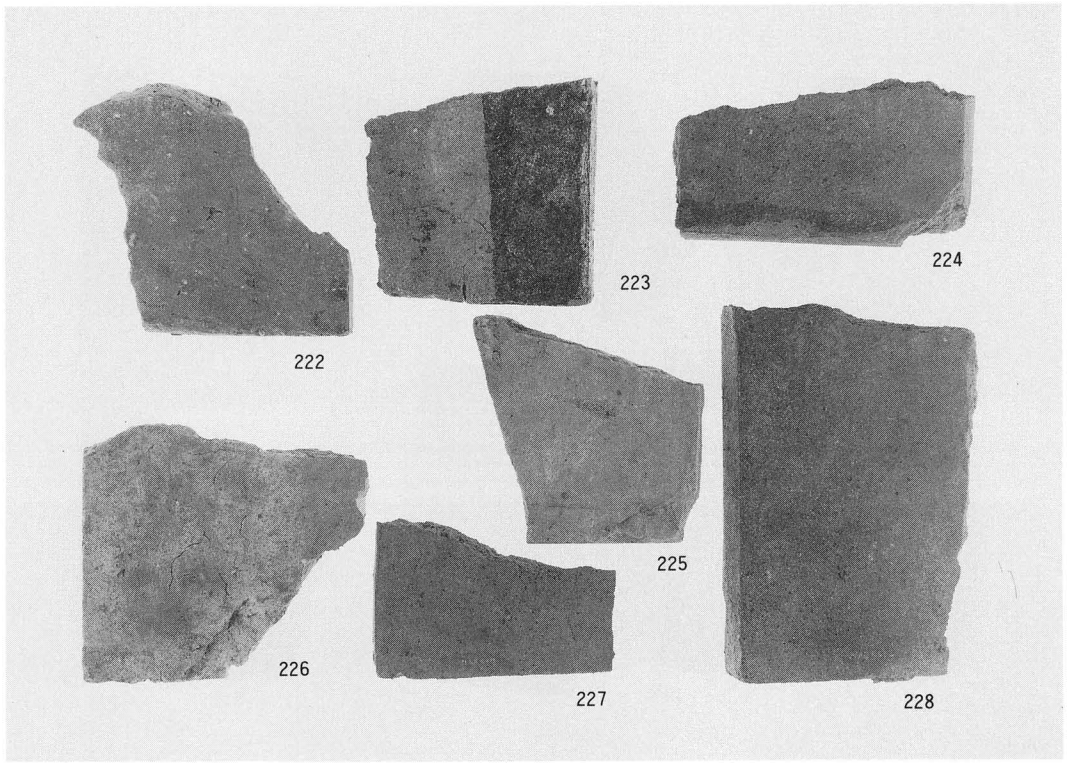
1．釉薬瓦A－丸瓦凹面



2．釉薬瓦A－丸瓦凸面



1．釉薬瓦A－平瓦凹面



2．釉薬瓦A－平瓦凸面

高岡市埋蔵文化財調査概報第14冊

前田墓所遺跡調査概報II

1990年３月31日

発行者　高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路７－50

印刷所　有限会社東陽印刷所

富山県高岡市早川155－７